

若令去勢牛の肥育試験

中尾峰二・成清文雄・松木主計・小池英治
(佐賀県畜産試験場)

NAKAO, M., NARIKIYO, F., MATUKI, K. and KOIKE, H.
Studies on the Body Weight Gain, Feed Utilization and Carcass Characteristics
of Fattening Beef Steers grazed on the Range prior to Finishing

1. 目 的

若令去勢牛の肥育過程において、肥育初期野草地への放牧がその後の肥育におよぼす影響を知るため本試

験を実施した。

2. 試験方法

供試牛は生後6～7月の黒毛和種去勢牛で同父系の

もの3組を購買し、肥育期間は333日で3期に分け、試験区は前期150日間共同放牧を行ない、中後期は舎飼とし、対照区は全期間舎飼とした。濃厚飼料給与量は両区とも同一とし、体重の1.0~1.8%を給与した。

なお、中期に両区ともプロゲステロンと安息香酸エストラジオール合剤（フトラックスS）を一管耳根部に埋没した。

3. 試験成績

	増 体 量 (kg)									
	開始時 体 重	終了時 体 重	増 体 量				1 日 平 均 増 体 量			
			前 期	中 期	後 期	全 期	前 期	中 期	後 期	全 期
試験区	200.7	494.0	83.0	92.7	117.7	293.3	0.553	1.030	1.266	0.881
対照区	204.0	475.7	100.3	85.7	85.7	271.7	0.669	0.952	0.922	0.816

増体は全期間を通じ両区ともほぼ順調であったが、試験区の前期放牧中の増体が少ない原因としては、梅雨や7~8月の暑さと放牧末期の草質低下による採食量の不足およびダニの害等が考えられた。

飼料摂取率において、濃厚飼料は前期においては大

差なく良好であったが、中期から両区間に差が生じ、対照区は肥育末期になるに従い摂取率が低下した。粗飼料は中後期の比較であるが、中期から末期にかけて両区とも低下し、特に対照区の低下度が大きく、平均摂取率は試験区が良好であった。

	飼 料 摂 取 量 (風乾物, kg)						
	濃 厚 飼 料		粗 飼 料 (中後期)		1 kg増体所要養分量(中後期)		
	摂 取 量	1 kg増体所要量	摂 取 量	1 kg増体所要量	D	C P	T D N
試験区	1,391,340	0.744	681,977	3.243	0.751	5.344	
対照区	1,349,267	0.966	612,340	3.578	0.885	6.113	

1 kg増体所要量はいずれも試験区が少なく、飼料の利用性が良好であった。

解体成績は、枝肉重量は最低が130kgで全て良好であった。枝肉歩留りは試験区59.1%対照区60.2%で僅差ではあるが対照区がよかった。枝肉の外観および、肉質は両区間に大差はなかつたが、皮下脂肪の付着で試験区が若干良好であった。

ホルモン剤埋没による外貌、肉質の変化は対照区がないのではつきりしないが、尾根部の隆起が見られた

他は、肉質においても顕著な変化は見られなかつた。収支概算では試験区が4,865円収益が高かつた。

4. 考察および要約

試験結果から、肥育初期における野草地への放牧は、舎飼期における飼料の利用性がよく、増体や肉質にも好影響をおよぼすことが考えられ、放牧地の環境整備を行なえばよりよい成績が得られるものと思われる。